

増澤元一さんのこと

日立中央研究所の正門を入れて暫らく行くと、「返仁橋」と言う武蔵野の名川 野川の源流を渡る橋がある。この緑豊かな谷あいには掛かる橋は、手前と渡り切った所では “へんじん” の意味合いが違うと言われた。「研究者は何より一徹で ある意味”変人”と言われるひた向きが必要」と言う事で、渡り切った所で人は変人に豹変する事を求められた。逆に渡り返して橋を後にしたときには”返仁”変わり、「世間に仁を返す日立の心に帰る事」だとお教えられた。

この橋を渡った先には大きな立派な研究棟(本館)があり、それは多くの一徹な研究者、変人を擁する「変人の城」でもあった。この本館の横を廻って裏手に行くと、年季の入った木造平屋の建物が数棟あった。そのうちの一棟が中研の中でも更に「中研の三変人」と言われた二木久夫課長率いる 24 研(第 2 部 4 研究室)があった。“二木教室”とも“二木一派”とも言われ、特異に見られた研究室で、華の半導体研究の第 2 部に有りながら、熱的負性抵抗体 いわゆるサミタの研究開発に携わり、少々特異な存在の様に見られていた。しかし二木さんの“ひた向きで厳しい研究変人”に指導され、皆緩みの無い変人への道を邁進しており、研究室には常にぴりぴりとした緊張感が漂っていた事は否めなかった。その中に有って増澤さんは、応用・製品化の研究に携わり、厳しい研究室雰囲気環境にあっても、皆の潤滑的存在を発揮され、彼の鷹揚とした性格が回りを包みませ、研究室を裏で支える役割も果たしていたと思えた。

増澤さんのお付き合いはこの時から始まり、以降公私を越えて 60 有余年深く親交を続けて戴いた。ゴルフのお付き合いも、彼に一から教えて戴き、それも 40 数年と長きに亘り、出来の悪い弟子に懲りずにお付き合い戴いた。彼は野球の名手でもあった。中研野球部で中核をなす強打者であり、私も港区のチームに所属していた事で、彼に誘われて入部をした。その時初めて彼が投打とも左利きである事を知った。「鉛筆・箸の類は右に直されたが 細かい事は左の方が得意」と言っていた。この左利きと野球の経験が、後々彼のゴルフに影響する事になったと思う。

さて長々とした前置きになったが、この中研時代に培われた財産“一徹でひた向きな変人要素” “二木イズムに磨かれた研究心” “人を包み込む親分的人格”そこに左利きが右でゴルフをすると上達すると言われる様に、上達スピードは人に倍するものがあったと思う。彼のゴルフは高崎工場に移転してからで、ひた向きに思いを強めて行ったのは、昭和 50 年代後半の事であった。暫らくして工場長主催の部課長コンペが開催される様になり、ゴルフを始める方 練習に熱を入れる方が多くなったが、その時既に増澤さんは上級者の域に達していた。私は彼からいろいろご指導も戴いたが、効果は出せず常に下位の成績から脱却する事はなかった。その当時のピリッドを一つ。ある部課長コンペの事である。朝 打ちっ放しの練習を増澤さんも入念に行っていた。若さの左利きが 右打ちでぐんぐん豪打を飛ばす。数打の後、豪打と共にドライバーの先も素っ飛んだ。うーんっ！手元に残った 50センチ程のクラブシャフトを見上げ、しばし固まっていた。私と小野山さんが後ろで見ていて、思わず吹き出しってしまったが、事の重大さは当時“馬”と言う 1・2 位を予想するゲーム(敢てゲームと書く)に有った。増澤さんはその本名の一人で、ドライバー無しでは本命の期待にたえられない。

「私のドライバーを貸しますよ」と言ったら

「本当！有難う！」助かったと安堵表情になった。果たしてコンペの結果は、多くの予想者にたえて、増澤さんが優勝！ 優勝者の挨拶に向かう彼に

「借りたドライバーの話をしてね」との念押しに「解ってる」と言ったのに

「今日はプレー前の練習でドライバーを折って仕舞、三井君のドライバーを借りました。やっぱりゴルフは道具で無くて腕ですね・・・」と言った。あたかも私のドライバーが粗悪品であるが如く。

席に戻って来た彼に「増澤さん 何を言うの！」申し上げたら「悪い 悪い これ上げる・・・」と言って、賞品の一部ボール3個を差し出した「そんなもの貰えるか！」と応じたが、確かに彼の腕前はプレーにも技術にも飽くなき研究心に裏打ちされたものであり、道具より腕の方が勝っていたものと納得した。以後ゴルフをやめるまで、道具であれ 技術であれ **磨かれた研究心**は休む事が無かったと思う。

話を一気に飛ばして増澤さんと私が、山形の赴任先から戻って来てからの事である。数回ゴルフを行う内に、彼から「高崎工場卒業者を纏めてゴルフの会を作らないか」と提案された。その発案の理由は他にあったが、それは敢て伏せて置く。彼が青森赴任時代にお仲間であった秋山寛さんも加わって、ゴルフクラブ結成の話合いをした。2002年(平成14年)6月、暑い日で汗を拭きながら開設の趣旨 幾つかの方向を決めた。細かい事は「三井君 纏めてよ」と言われた。その時の大綱は1.気楽で縛りの無い(解放的) 2.お互いを大切に明るく(互助) 3.会費なし(クリ-ン) コンペの参加も自由と言う程度で、命名は敢て日立の冠をやめて「高崎倶楽部」とした。この大綱も、前述した彼の**鷹揚**として人を**包み込む様な優しさ**が、発想の中心にあった事は間違えない。主コースは、手軽で廉価 当日の参加 不参加も自由が利く高崎市民ゴルフ場とし、2~4回/月程度の開催を目処にした。第一回は翌7月に、高崎市民ゴルフ場で3人だけのコンペで有ったが、何か楽しい事が始まる様な高揚したのを感じた。翌月の二回目は、藤野 三ツ森 藤沢さん達が参加されて、段々賑やかになった。回を追って入会者も増えて、年末には現在でも活躍されている吉田さん達の参加を得て、総計14名になった。役員は温厚な秋山さんが会長、増澤さんが統括 私が事務局を受持つ事になった。日にち コースの差配は増澤さんが決め、秋山さんが予約を取り それを私が会員各位に伝える程度の、緩い運営を心掛けた。年末には忘年会を兼ねて一年の成績報告をしたが、最終コンペ当日の夜に忘年会だったから、コンペが終わって年間データの集計・資料作成をすると言う、大変に忙しい対応であった。表彰は賞品が無いので、最優秀成績者に表彰状と、マスターの称号を与える事で了解戴いた。初年度は増澤さんがマスターとなり、皆が大いに祝福をした。ところがである、翌年2003年(H15年)も増澤さんが最優秀成績者となり、何を表彰するか困った挙句グランドマスターと、マスターの格上げ表彰してご勘弁戴いた。このままでは毎年増澤さんが上位で、誰か増澤さんを越える人はいないかな~と思案した結果、それは吉沢さんをして他にないと考え、是非入会戴きたいとお願いして2004年から参加戴いた。果たして結果は、吉沢さんが年間平均79.5と言う素晴らしいスコアで、増澤さんの3年連続を阻止して呉れた。しかし2007年には、増澤さんが三たび最優秀成績者となり、称号に困った挙句苦し紛れに**永代**をかぶせて、**永代グランドマスター**とさせて戴いた。私が成績を纏めた2011年までの10年間で、増沢さん3回 小野山さん吉田さんが各1回 吉沢さんが5回の最優秀成績者となり、結局永代付き称号もその先 手づまりとなり、吉田さんのご自宅の銀杏、皆が集めたrostボールが最優秀賞として授与されたりした。後年更に茂木さんが得意とされていた面打ち作品、“おかめの面”を表彰盾に使わせて戴いたりしたが、これらは決して惨めな対応ではなく、皆でわいわい楽しく受け止めたものであった。増澤さんの最高スコアは、2004年ロイヤルオークでの75と記憶しているが、それに増して10年間で90打以上のホールは、僅か10ホール程度で凄い記録で有った。これは彼の飽くなきフォームの追究、クラブ等道具の勉強に依るものと思う。中研時代に養われた **一徹でひた向きな変人要素(返仁の心)**と **妥協しない研究心(二木イズム)**に立脚したものであろう。

冬季は例会の開催は行わない事にしていたが、暖かい所でプレーしようと2004年3月に富士高原CC、2005年2月館山CCを開催、秋山 増澤 興津 関と私が適宜参加し、いずれも

温泉・観光を楽しみながら1泊旅行を行った。更に2005年6月には興津さんプロデュースで、マレーシアツアーを開催。高崎倶楽部からは秋山 増澤 興津 吉田 三井と、坂本さん達の“YOSAKOI”グループ3名と女性2名でペナン ブネッドジャンブルと、マレー半島中部のキャロンパンドで、ゴルフを楽しんだ。この時増澤さんは82 90といずれも第一位、吉田さんが93 93でお二人だけが二桁スコア、他は全て100越えでした。この寒さ 暑さのゴルフでも増澤さんのスコアは安定しており、環境に左右されない確固たる技術を完成させていたと考える。

次に「会員の勉強会をやりましょう」と提案したら、増沢さんから各種保険 インターネットの知識を得たいと言う事で、2003年5月と8月にそれぞれ 損保ジャパン NTTの高崎支社にお邪魔して、講習会を実施する事が出来た。日立製作所のOBと言う事で、講師の方もそれなりの職位の方で、こちらにも会員には高崎倶楽部 理事の肩書を付けた名刺を渡し名刺交換に臨んで戴いた。この時秋山会長呼称を理事長に改変し、増沢さんも統括理事と言う肩書にさせて戴き以降理事長名を定着させた。講習会は好評であり、今後の勉強会も継続して実施する事を了承された。

理事長の変遷は、増沢さんの推薦で2009年から吉田さんに引き受けて戴、2014年から前任からの推薦で中山さんへと受継がれた。吉田理事長の在任中に会員も50名近くに増加し、会の運営法も整備・補強がされ、確固たるものとなった。吉田さんのご尽力に感謝したい。また、このあたりから、高崎倶楽部がOBの拠り所的性格も持ちつつあると考え、2013年10月にルネサス総務部に出向き、今後日立ないしはルネサスのOB会を作るかを確認に行った。結果「そのような状況に無い」との回答を受けて、高崎倶楽部はOBの拠り所的性格も考えて、更に体制を固める事とした。役員で打合せた結果、会長職を設け坂本 真さんにお引受け戴く事とし、ご依頼申し上げご了解戴いた。(名誉会長の呼称は吉田理事長の提案) この時 高崎倶楽部が一層確固たるものになったと思う。

高崎倶楽部も地域社会等にお役に立つ事が出来ないかと言う事の議論もした。2005年12月 NPO 法人化の検討を興津さんにお願ひし、お嬢様の力もお借りしてかなり綿密な計画も戴いた。複雑だった為か、増沢さんから「時期尚早だ」の一言で保留にされた事は残念で、増沢さんの横暴ともとれる判断に、私も少し腹がたったが、興津さんにはお詫びと、時季を見て再考する事でご了承戴いた。(未だ未実施ではあるが)

ただしである、2011年の東日本大震災の際 高崎工場からデジタルICの後工程作業の依頼や、会員の林昭二さんが出向されてお世話になった、日立工場臨海工場エレメント部関連の、日立原町電子が被災し、その後の原発放射線被害もあって、従業員始め会社全体が大変な状況に陥り、義援金等に支援要請に受けた。吉田理事長 林さんの元、いち早く倶楽部内に協力を求めた結果14万余円の募金有り、吉田理事長からエレメント会保坂憲一様(本年7月ご逝去)に送金した。大変に感謝戴いた。NPOでは無いけれど、NOP的発想の行動も行えたと思っている。(返仁的対応が出来た)

話を戻して増沢さんの横暴の件をもう一つ。2005年頃の忘年会で宴もたけなわの時、話の行きがかりから、突然増沢さんが会計係を作ろう「M君 君会計をやって呉れ」と言った。「ちょっと そんな事急に決めたら駄目だよ」と注意したら、その後二三やり取りをしている中で「解った!もういい!」と怒って、あっけにとられる皆を後目に席を立てて帰ってしまった。後日 この前は済まなかったと詫びられ、いつもの鷹揚な親分に帰って呉れて事は治まった。

そんな彼が2014年の忘年会の後「変わったな」と一言云った。何かなども思って聞いた内容は 共感するところも有ったが、少々冷めた理由でもあった。その後彼は2015年からは高崎倶楽部の集まりには全て不参加となった。体調が優れない事理由としていたが、秋山さんの心臓病で離脱などで、彼に取って滅入る事が多かったと思うが

「変わった」事で意見を挟めば、会結成時の思いが壊れる事と考え、不参加を決意した様であった。それでも私は懸命に慰留しコンペには出る事を強く促し、ようやく7月のコンペに渋々ながら参加して呉れた。それが最後で以降は完全に高崎倶楽部を離れてしまった。皆に挨拶する事も無く、少し寂しい事実上の退会となった。それでも増澤さん招集のゴルフは、原点の高崎市民ゴルフ場で 増澤 秋山 茂木 興津 私のメンバーで 2016年まで続き、ゴルフを愛する気持ちは持って居られた。彼はその後体調が優れないと再三言っていた。2017年12月に増澤さん宅に呼ばれ「三井君 俺のクラブ一式を君に貰って欲しい」と突然に言われた。ゴルフを止める宣言でもある。私は戸惑い「そんな事出来ない ゴルフは続けて欲しい」と強く拒んだが、どうしてもと言うので取りあえずお預かりする事として、彼が大切にしていた道具を車に積んで帰った。少し胸の詰まる思いをしながら・・・

彼があんなに愛したゴルフをやめた時、断腸の思いであったか やり切ったと思ったかは定かでないが、それ以降彼の口からゴルフの話は全く聞けなくなった。

冒頭「研究者は何より一徹で ある意味「変人」といわれる ひた向きさが必要」と記したが、増澤さんを「変人」とまでは言わないが、ゴルフに懸ける情熱は、一徹で妥協せず、ただひた向きに楽しさと技術の向上を追求し、我々に実践披露してその範を示してくれた。大切な「変人」で有ったと改めて思い返すと同時に、高崎倶楽部創設から現在まで実に20数年、多くの会員が楽しく集う会に尽力戴いた。或る意味これも中研の心「返仁」の帰結するものかも知れない。彼への感謝を忘れてはならない。

2024・12・三井